

こわい人その2

2020.9.8

その夏、平成14年の夏休みの憂鬱さは今でも覚えている。半ば開き直って、それまでの自分の実践を基にした経験と、自分がこれからやってみたいことを原稿としてまとめた。お盆の期間が過ぎ、提出日が近づき、ますます憂鬱になっていった。なにせA4判1枚の原稿を出すと、たったの2行分ぐらいしか残らない指導をいただけるという“こわい”方である。「私の原稿など20ページのうち1ページ残ったらいいほうだ」と思っていたくらいである。

いよいよ提出日を迎え、封筒から原稿を取り出し、おそるおそる、びびりながらあの方に原稿を差し出した。そして、あの方が私の原稿に目を通していている時間の長いこと長いこと。「きつとめった切りにされる」という覚悟はできていた。頭の中は「ゼンメツ」という言葉がぐるぐると巡っていた。

すると、ついにあの方からの一言があった。「いいね。わかりやすくて～」 「あれっ」予想外に褒められ、拍子抜けとともに、力が抜けてしまい、何を言われたのか覚えていないほどであった。兎にも角にも褒められたのである。

国語教員人生の最大の危機を何とか脱し、その後いろいろと考えてみた。「あの方は、あまりにもひどい原稿で直しようがないから褒めたのではないか」「自分ではとても素晴らしい原稿とは思えない。何かある」結局恐ろしくて何も聞けないので、事の真相はわからない。ただ、こわい人に褒められるとこんなにもうれしいものなのかと思ったものだった。

それでも、平成14年の夏、あの中学校での1年目の夏を思い出すと、褒められたことよりも、今でも重苦しい憂鬱な気分になるのである。平成14年夏のピンチを何とか乗り切った私ではあったが、そもそも平成14年度の1年間そのものがずっとピンチの連続であった。

イタリア、ローマ日本人学校から日本に戻り、中学校に勤務することになった私の前に、「『授業改善専門講座』〇〇市教育実践センター」というパンフレットがまわってきた。中身を読み、「これだ」と思った。それは、年間4回の研究授業を行い、1対1のマンツーマンで指導をしていただけるというものであった。

日本の学校に復帰した私には、ちょうどいい機会だと思われたのである。この中学校の前、ローマ日本人学校に行く前に勤務していた中学校のときの校長先生からも「今度、実践センターでこういうものを始めるから受けた方がいい」と言われていた。

私は、早速校長先生と教頭先生にお願ひし、申し込むことにした。問題は、誰の指導を受けることができるかという点である。中学国語の指導担当者はお二人いらっしやった。一人が例の「こわい人」で、もう一方も存じ上げている校長先生であった。私は内心「こわい人」にならないことを祈っていた。そもそも、あの方が私を選ぶわけがないと勝手に思い込んでいた。

ところがである。私の担当は、よほど縁があるのか、あるいは何なのか「こわい人」になってしまったのである。正確に言うと、「こわい人」が私を選んだようだった。「なぜだ」私は「終わった」と思った。年間4回も「こわい人」に指導案を見ていただき、授業を参観していただき、指導をしていただくなど、とてもあり得ないことだった。身も心ももつわけがない。逃げ出したくなった。だが、そういうわけにもいかない。私は追い込まれた。 (次号に続く)